

実践報告2

振り返りシートを活用した評価

愛知県立旭野高等学校	教諭	木下	裕美
愛知県立東海南高等学校	教諭	深澤	晶
愛知県立岡崎北高等学校	教諭	富田	理恵子
愛知県立時習館高等学校	教諭	清水	翼

1 はじめに

振り返りシートは英語科をはじめとした教科教育の場で定着しており、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の必要性の高まりにより、その使用頻度が高まっている。しかし、その使用については以下のような疑問点がよく聞かれる。

- (1) いつ、どのように振り返りをするべきか。
- (2) 振り返りシートの作成や準備に手間や時間がかかるのではないか。
- (3) 生徒の「主体的に学習に取り組む態度」の評価にどう生かすべきか。
- (4) そもそも、振り返りシートは必要なのか。

そこで、私たちはこれらの疑問や課題について実践を通して研究し、最終的に汎用性のある振り返りシートのフォーマットを提案する。

2 振り返りシートの在り方

国立教育政策研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（高等学校 外国語）』によると、「「主体的に学習に取り組む態度」の評価に際しては、…（中略）…知識及び技能を習得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価することが重要である」（pp.10-11、下線は筆者による）とある。

この記述から、振り返りシートは自己の学習状況を振り返り、それを次の学びにつなげるという観点で作成及び活用することが望ましいことが分かる。

3 実践例1 タスクごとに目標を設定して振り返りを行う

疑問点(1)及び(2)の解決策として、「話すこと（発表）」を扱う単元での実践を行った。ペアで1つのプレゼンテーションを発表する活動を行い、タスクごとに振り返りを行うシートを活用した。

(1) 実施方法

トピックとフォーマットが指定されたプレゼンテーションを即興で行うことを目的として、4時間配当で以下のようなタスクを設定した。各タスクに応じて《 》内の内容について振り返りを記入した。トピックは教科書の題材に関連した4つのものから、授業者が各ペアに割り当てた。

- ア 1時間目：割り当てられたトピックについての情報収集
- イ 2時間目：アウトラインメモ作成、実践1回目（ペアで確認）《自己評価、感想》
- ウ 3時間目：実践2回目（タブレット端末へ録音）《音声聞き改善すべき点と感じた点》、改善策を考えた後、実践3回目（再びタブレット端末へ録音）《前時の取組を踏まえた感想》

エ 4 時間目：同一トピックのペア間での発表と最もよいペアの選出 《最もよいペアの選出理由、他ペアからの学び》、各トピックで最多得票を得たペアによる、クラス全体への発表《最もよいペアの選出理由、前時までの取組を踏まえた感想、今後の目標》

(2) 目標設定

プレゼンテーションの目標として、振り返りシートの冒頭に以下の3点を挙げることで単元のねらいを明確にした。

ア トピックの解決策を示す

イ 聞き手を説得する

ウ 論理の構成や展開に工夫を行う

また3時間目と4時間目に行う振り返りの内容にある「感想」は、前時の取組及び前時までの取組を踏まえて記入することとした。これにより、各タスクでの学びを積み重ねながら完成形に近づけていくというアウトプット活動の基本的なプロセスを実感できるようにした。

(3) 振り返りシートの記載についての考察

ここでは、抽出生徒A及び生徒Bの2名の生徒の振り返りシートの記述を例示する（資料1）。生徒Aの2時間目の感想にある「プリント」とは、発表において有用な表現をまとめたプリントのことで、2時間目（実践1回目）の後で、生徒が使用した表現を見直すための一助として配付したものである。

【資料1 生徒の振り返りシートの抜粋】

生徒A	2 時間目 「感想」	内容はともかく、つながりや話のもっていき方が難しいと感じたので、プリントを参考にしたい。
	3 時間目 「前時の取組を踏まえた感想」	相手を説得するためには、内容やつながり、展開などさまざまな要素が揃うことが大切だと分かった。
	4 時間目 「他ペアからの学び」	しゃべり続けるだけでなく、相手の興味をひきつけることができるように工夫する。
	4 時間目 「前時までの取組を踏まえた感想」	相手に説明する際に、ジェスチャーや、自分たちの話題が伝わっているかを確認するような表現を入れていてよかった。
	4 時間目 「今後の目標」	発表の時に相手の目を見たり、反応を確認したりできるようにしたいと思う。
生徒B	2 時間目 「感想」	話の流れと時間配分はよくできていた。難しい内容なので、簡潔に説明したい。
	3 時間目 「前時の取組を踏まえた感想」	同じ表現を使わないようにした結果、違う表現を増やし、聞き手が内容を区別することができにくくなってしまった。
	4 時間目 「他ペアからの学び」	要点ごとに間をつくって分かりやすくする。否定文を使って、背理法のようにメリットを挙げる。
	4 時間目 「前時までの取組を踏まえた感想」	発表を短く伝わりやすくするよう、材料集めの段階から意識することで、どう話せばよいかをいつも以上に考える機会になった。
	4 時間目 「今後の目標」	事実を並べるだけでなく、大事な点を反復することで、今何を話しているかが伝わるようにしたい。

生徒Aは、2時間目（実践1回目）に構成についての課題を感じ、3時間目（実践2回目）に、その課題と説得力との関係を見いだしている。さらに4時間目に他のペアの発表を聞いて、ジェスチャーや理解を確認する表現が聞き手の興味を高め、結果として発表の完成度を高めるということに気付く、今後にその学びを生かそうとしている様子が見て取れる。また、生徒Bは内容の難解さを解消するために、簡潔な説明やささまざまな表現の使用を心がけた結果、かえって分かりにくくなることに気付いた。しかし他のペアの発表を通して、間をつくることや説明を論理的にすることで発表を分かりやすいものにできることを学び、準備段階からの意識が大切であると振り返ることができた。

(4) 成果と課題

2つの疑問点への解決策と今後の課題は、次のとおりである。

振り返りシートへの記入のタイミングと方法については、タスクごとの目標を明確にした上で振り返りと自己評価を行うことで、生徒が学習状況を把握し、それを学習の調整に生かすことができると分かった。課題としては、タスクの進行とともに目標が順次更新されることにより、生徒が先に行った振り返りを見失ってしまう可能性がある。

次に、振り返りシートの作成や準備に手間や時間がかかることについて、今回は感想を中心とした比較的シンプルな構成とし、自己評価も全ての項目を“**Yes**”と“**No**”の2択とした。また、他のペアの評価も「よい」と「普通」の2択としたが、生徒は自己評価及び他者評価から次への学びを得ていることが見て取れる。一方、作成した振り返りシートは、他の領域の活動ではそのまま使用できないため、より汎用的なシートを作成することが望ましい。

4 実践例2 振り返りシートと個人プレゼンテーションで「主体的に学習に取り組む態度」を評価する

「話すこと（発表）」に関する個人プレゼンテーションのパフォーマンステスト、すなわち成果物を振り返りシートと併用することで、「主体的に学習に取り組む態度」を評価した。

(1) 実施方法

- ア 振り返りシートに目標と中間報告を記入して提出する指導を行った。
- イ 振り返りシートの記述がパフォーマンステストに反映されているかを見取った。
- ウ 生徒にフィードバックを行った。

(2) 用意したもの

- ア 振り返りシート
- イ パフォーマンステストの実施要項
- ウ 「主体的に学習に取り組む態度」を評価するルーブリック

(3) 目標設定

振り返りシートを配付し、生徒が自らの目標を設定することから始めた。普段の生徒の実態把握から、伸ばしてほしいと授業者が感じる3つの項目を挙げ、そこから目標を自分で選択する形にした。その3つとは、「聞き手に分かりやすい英語・発音・イントネーションで話す」「話すときに、メモに頼らず、顔を上げて相手を見る」「（このプレゼンテーションのテーマである）生物保護に対して自分の意見を述べる」である。その上で、目標達成のために何をしたらよいのかを生徒自身が考えて振り返りシートに記入した。授業者はその目標設定と手段が妥当なものかどうかを確認した。

(4) 評価のルーブリック

今回は振り返りシートの記述から「主体的に学習に取り組む態度」のみを評価するため、「知識・技

能」と「思考・判断・表現」の観点の評価しなかった。生徒が設定した目標について、達成できたかではなく、達成しようとしているかで評価した（資料2）。

(5) 振り返りシート

【資料2 実践2で使ったルーブリック】

抽出生徒Aの振り返りシートを例示する（資料3）。生徒Aは目標として「話すときに、メモに頼らず、顔を上げて相手を見る」を選択した。アイコンタクトをうまく行うには、授業で行っているブランクリーディングのペア活動で何度も練習し、顔を上げて読めるようにしたいと記入していた。

	「主体的に学習に取り組む態度」
a	目標に向かって十分な努力・改善が分かる
b	目標に向かって努力・改善が分かる
c	目標は立てたが、それに向かっていない

中間報告の「part1 後」の記述に「読みの練習を3回した」とあり、自宅で練習したことがうかがえる。「part2 後」には「時々、相手の顔を見て話すようにした。うなずいていたので、伝わっていると思い安心した」と書いていた。顔を上げて話し、相手の反応を確認したことが分かる。「part3 後」では、相手をよく見るためには英文を覚えることが大切だと考え、それを実行している。「part4 後」では、事前に英文を読んで覚え、授業に臨んでいることが分かる。パフォーマンステスト後の振り返りでは、「アイコンタクトを何度もできた」とあり、取組についての自己評価をaとしている。

【資料3 生徒の振り返りシート】

Step 1 目標設定	
2	ペアリーディングなどの際に、できるだけ顔を上げて読めるようにする。何度も読む練習をしておく。
STEP 2 中間報告	
時期	★目標達成のためにやったこと・改善すべき点
part 1 後	3回ほど読みの練習をしてきたが足りなかった。もっと増やしたほうがよいと思った。
part 2 後	時々、相手の顔を見て話すようにした。うなずいていたので、伝わっていると思い安心した。
part 3 後	英文を見て、覚えて、口にするようにした。相手の方をよく見て話せた。
part 4 後	授業の流れで、自動的に目標が達成できた。事前の練習が大切だと思った。
プレゼン後	アイコンタクトを何度もできた。スピーチの前に練習しないといけない。（イントネーション、内容）
STEP 3 最終報告	
自分の取り組み具合	a（十分満足）・b（おおむね満足）・c（努力を要する）→自分（ a ）

(6) パフォーマンステスト

パフォーマンステストでは、生徒は3人から4人の班の中で、順に発表した。授業者は各班を見て回り、各自の目標とプレゼンテーションの様子を照らし合わせながら評価を行った。生徒Aは、パフォーマンステストで聞き手とのアイコンタクトを十分に行っていたため、授業者の評価をaにした。

(7) 成果と課題

振り返りシートがあることで、授業者は「主体的に学習に取り組む態度」の評価の見当をもつことができた。次に、パフォーマンステストだけで評価する場合と比べて、振り返りシートを参照することにより、生徒が目標に向かって試行錯誤している過程をより具体的に把握することができた。今回は「主体的に学習に取り組む態度」の観点のみに焦点を当てたため、授業者は評価が容易となり、今後も継続可能であるという手ごたえを得た。これからも振り返りシートを活用した評価を定期的に行いたい。

5 実践例3 パフォーマンステストまでの過程を評価する

この実践では、パフォーマンステストに向けた言語活動の中で、「振り返り」と「改善」のサイクルを複数回設定し、振り返りシートを用いてパフォーマンステストまでの過程を評価することを試みた。

(1) パフォーマンステストに向けた言語活動と振り返りシート

ライティングのパフォーマンステストに向けた準備として、「愛知県に外国人観光客を呼び込むためのアイデアを出し、会議でみんなを説得しよう」というテーマでディスカッションとライティングの活動を実施した。どちらの言語活動でも最初にループリックを共有し、それを参考にして生徒自身で個人の目標を設定した。その後、ディスカッションとライティングを複数回行い、生徒は1回ごとにループリックと自分が設定した個人目標についての自己評価を振り返りシートに記入した。ディスカッションとライティングの振り返りシートは1枚の紙の裏表に印刷し、1枚で生徒のパフォーマンステストまでの過程が読み取れるようにした。

ア ディスカッション

4人一組のグループをつくり、カードに観光客を呼び込むためのアイデアを時間内にできるだけ多く書く活動を行った。その中から各グループで8枚選び、裏返してシャッフルした後、カードを順番に引き、引いたカードに書かれているアイデアについて、受動態を用いて1分間で発表した。各発表後に30秒で質疑応答を行った。その後、グループ内で意見を出し合い、各グループで最も優れた提案を決めた。そして、残りのカード4枚を使って同じ活動をもう一度行った。振り返りシートを使ってループリックの自己評価はa、b、cの3段階、個人目標の自己評価は1から5の5段階で評価する形にして、2回分書き込めるようにした。記述式の振り返りは、生徒が書きやすく、授業者が読み取りやすいように、「よい点(good)、改善すべき点(bad)とその原因(reason)、次に向けての目標(next)」の順で書くように型を指定した。

イ ライティング

ディスカッションの内容を基に、「愛知県に観光客を呼び込むためのアイデア」について辞書を使わずに制限時間内に60語から80語で書くライティング活動を行った(First Writing)。工夫したこととして、ライティング活動の振り返りをしやすくするために、振り返りシート上に英文を書く欄を作成した。その後、辞書や参考書等を用いて推敲を行った(Second Writing)。最後に、AI添削ツールにSecond Writingを入力し、そこで指摘された内容を参考にして英文を修正した。ディスカッションと同様、生徒はループリックと個人目標に対する自己評価を振り返りシートに毎回記入した。1枚のシートに目標や自己評価、生徒の3回分の英文を載せることで、生徒も授業者も変化が一目で分かるようにした。また、AIによる添削はたたき台であることを伝え、指摘された内容を再度調べたり、疑問点や新しく学んだ内容を具体的に記述したりする欄を設けることで、生徒が学びを深め、授業者は生徒がつまづいた点を把握できるようにした。

(2) 「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法

単元の終わりにパフォーマンステストとして、3人の外国人観光客の年齢や趣味、日本へ来た回数などが書かれたプロフィールを読み、1人を選択してその人に合うモノやイベントを紹介するメールを作成した。このディスカッションとライティング活動に用いた二つの振り返りシートを、パフォーマンステストの際、「主体的に学習に取り組む態度」の評価に反映させた。評価規準の条件を満たした上で(次ページ資料4)、「粘り強い取組」や「言語活動に表れた変容」が見られた場合はaの評価とした(次ページ資料5)。

【資料4 パフォーマンステストの評価規準】

「思考・判断・表現」	<ul style="list-style-type: none"> ・提案するモノやイベントについて分かりやすく説明している。 ・提案するモノやイベントについて、そのアピールポイントについてその根拠や例とともに伝えている。 ・受動態を1回以上正しく使用して表現している。
「主体的に学習に取り組む態度」	<ul style="list-style-type: none"> ・十分な語数（60語から80語）で書いている。 ・ディスカッションでの目標設定・自己評価・記述での振り返りをしている。 ・ライティングでの目標設定・自己評価・記述での振り返りをしている。

【資料5 パフォーマンステストのルーブリック】

	「思考・判断・表現」	「主体的に学習に取り組む態度」
a	bの条件を満たした上で、論理的で説得力のある内容になっている。	bの条件を満たした上で、「 <u>粘り強い取組</u> 」や「 <u>言語活動に表れた変容</u> 」が取組の過程や結果に見られる。
b	評価規準の3つの条件を満たしている。	評価規準の3つの条件を満たしている。
c	bに満たない。	bに満たない。

(3) 結果と考察

ア 生徒による自己評価の変遷

1年生の2クラス79名分の振り返りシートに記入された生徒の自己評価の変遷を分析したところ、ディスカッションでは、2回目に「自己評価が上昇した」生徒と「2回ともa」だった生徒は、全ての項目で4割以上いた（資料6）。特に「論理性」は最も高い割合になった。個人目標でも論理性に関する内容を設定した生徒が多く、個人目標の設定がルーブリックの評価の上昇につながった可能性が高いと考えられる。

【資料6 ディスカッションの自己評価の変遷（振り返りシートより）】

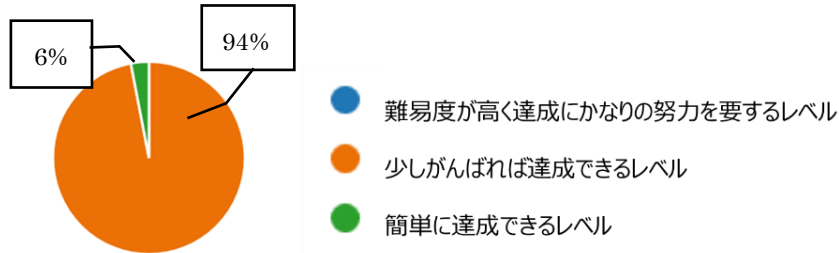
	2回目に評価が上昇、または2回ともaであった	2回目の変化なし	2回目の評価下降
論理性	52%	44%	4%
発話量	40%	48%	12%
伝え方	44%	56%	0%
やりとり	44%	44%	12%

イ Microsoft Forms によるアンケート結果

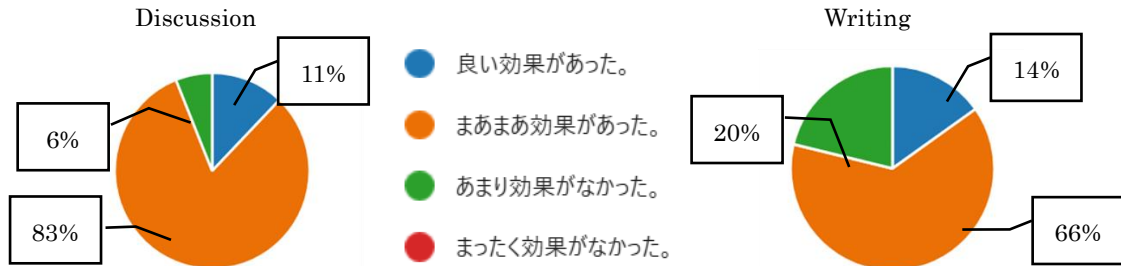
パフォーマンステスト後に、授業を実施した1年生の2クラス79名にMicrosoft Formsを用いてアンケートを行った。生徒自身が目標を立てる場合、最も心配されるのが目標の難易度である。生徒が適切な目標設定をできているかどうかを確認するために、ディスカッションで設定した個人目標の難易度について尋ねたところ、ほとんどの生徒が「少しがんばれば達成できるレベル」で目標を設定していた（次ページ資料7）。さらに、回収した振り返りシートからほぼ全ての生徒の個人目標の自己評価が1回目または2回目で上昇していたことが分かった。

目標を設定することに関しては、ディスカッション、ライティングともに「まあまあ効果があった」と答えた生徒が大半であった。また「効果があった」と答えた生徒も含めると、どちらも8割以上の生徒が目標を設定することには効果があったと感じている結果となった（次ページ資料8）。

【資料7 ディスカッションやライティングで自分で設定した目標の難易度は？】



【資料8 目標を立ててから言語活動を行ったことについて効果はありました？】



さらに、2回自己評価の機会があったことについて聞いたところ、ディスカッション活動で自己評価を2回実施してよかったと答えた生徒は77%、1回でよかったと答えた生徒は20%、自己評価は必要なかったと答えた生徒は3%であった。また、ライティング活動において「学んだことを具体的に記入する記述式の振り返りが必要か」という質問に対しては、「必要だと思う」と答えた生徒が34%、「まあまあ必要であると思う」と答えた生徒が46%、「あまり必要ないと思う」と答えた生徒が20%、「必要ない」と答えた生徒は一人もいなかった。さらに上記のように答えた理由について、主に次のような意見があった。

(ディスカッションにおける自己評価を2回実施してよかったと答えた理由)

- ・自身の成長が分かるから。
- ・自分に足りない部分を繰り返し感じることで、意識付けられるから。
- ・1回目で自分の位置を確認しながら、次に取り組むことが分かり、2回目で最終的なレベルを自分で認識できるから。

(ディスカッションにおける自己評価は1回でよかったと答えた生徒の回答)

- ・あまり評価が変わらなかったから。

(ライティングに今回のような記述式の振り返りが「必要」だと思うと答えた理由)

- ・学んだことを言語化することで学びを深めることができるため。

(ライティングに今回のような記述式の振り返りが「まあまあ必要」だと思うと答えた理由)

- ・自分が何に気付いたか、何を学んだかを後に見返すことができると思ったから。
- ・学んだことを書くと、定着しやすいと思ったから。

(ライティングに今回のような記述式の振り返りが「あまり必要ない」と思うと答えた理由)

- ・気付いたことは毎回ほぼ同じであり、その気付いたことをどのくらい伸ばせるかが課題だと思うから。

ウ ライティングにおけるパフォーマンステストの「思考・判断・表現」の評価について

今回のパフォーマンステストでは、振り返りシートの項目での評価は多くの生徒がaとなった。振り返りシートを活用し、自分の習熟度に合わせた目標を立て「振り返り」と「改善」のサイクルを複数回設定したため、この結果は当然であるとも言える。また少数ではあるが評価においてaにならな

かった生徒については、振り返りシートに空欄があることなど、うまく活用できていない状況が見られた。

(4) 成果と課題

振り返りシートは活動の観察だけでは難しい準備段階での「主体的に学習に取り組む態度」を評価するための重要なツールの一つとして活用できると言える。さらに、パフォーマンステストを実施する際、振り返りシートの作り方を工夫することで生徒の主体的な学びを促進することができると感じた。自ら目標を設定することで、英語力向上への意欲と意識が高まり、「振り返り」と「改善」を複数回行うことで「学習の調整」が行われ、最終的に考查のライティング問題で書かれた英文は通常より完成度の高いものとなった。

今後の課題として、評価の煩雑さの解消と、評価の信頼性が挙げられる。「言語活動に表れた変容」が取組の過程や結果に見られるという点において、特に複数の教員で評価する場合には「変容」の内容や程度についてより具体的に明示していく必要があると感じた。

6 汎用的な振り返りシートの提案

(1) 実践の考察

これまでに紹介した実践から、パフォーマンステストに振り返りシートを活用する場合の評価プロセスについて考察する。まずパフォーマンステストの目標を設定し、それを生徒と共有する。次に学習や活動の過程をワークシートなどに記録し、振り返りシートには生徒自身が活動を振り返る内容を記録する。「主体的に学習に取り組む態度」の評価の観点に「振り返りシート」の項目を設けて「粘り強い取組」や「言語活動に表れた変容」を記録から読み取り、ループリック評価に組み込むことが可能になる。振り返りシートの活用プロセスにはいくつかのメリットが考えられる。まず、生徒自身が学習を振り返ることで学習の調整が可能になり、授業者も次の授業で取り組むべき課題を発見できる。また、生徒自身が目標を設定し、スモールステップで達成していくことで、成長の実感を味わいながら次のステップへとモチベーションを高めることができる。そして、「最終評価」に加えて「中間評価」など定期的に自己評価を行うことで、「振り返り」と「改善」のサイクルが生まれ、生徒の英語力向上につながる。これらの効果から、振り返りシートはパフォーマンステストの評価において有効なツールであり、生徒の学びに向かう力を促す重要な役割を果たすと考えられる。

(2) 汎用的な振り返りシートの提案

振り返りシートを汎用的に使えるよう工夫して作成した(次ページ資料9)。各校の実践で得た経験を基に必要な要素を取り入れ、使いやすさを重視してシンプルな形に仕上げた。また、単元ごとにこのシート1枚で完結するようにしており、4つの段階で構成した。

最初に行うのは目標の設定である。授業者は単元の共通目標である“Unit Goal”を設定し、生徒はその目標を達成するために自分に不足していることや力を入れたいことを“Personal Approach”として記入する。これが“Unit Goal”への手だてとなる。

次に「中間評価」を行う。この段階ではパフォーマンステストの練習や学習の進捗を確認しながら、“Self-Check”の部分を4段階で目標達成状況を評価する。また、生徒は自分の“Personal Approach”が適切かどうかを振り返り、必要に応じて修正を加える。書きやすさを考慮し、「よい点(good)、改善すべき点(bad)とその原因(reason)、次に向けての目標(next)」という流れに沿って記述できるように工夫した。

単元の最後には「最終評価」を実施する。「中間評価」と同様の手順で行い、“Unit Goal”の達成状

況を4段階で評価しながら、“Personal Approach”の妥当性について振り返る。「最終評価」を通して、生徒は自身の学習成果を確認する。

最後に次の単元に向けた目標を考える。ここでは、これまでの“Personal Approach”を継続することも可能だが、次の単元で異なる領域の活動に取り組む場合には、あらかじめ授業者がその内容を提示し、生徒自身が新たなアプローチを設定する必要がある。

このように、4段階構成で作成した振り返りシートは、科目や領域を問わず汎用的に使用でき、生徒の学習進捗状況の確認と目標達成に貢献することを期待する。

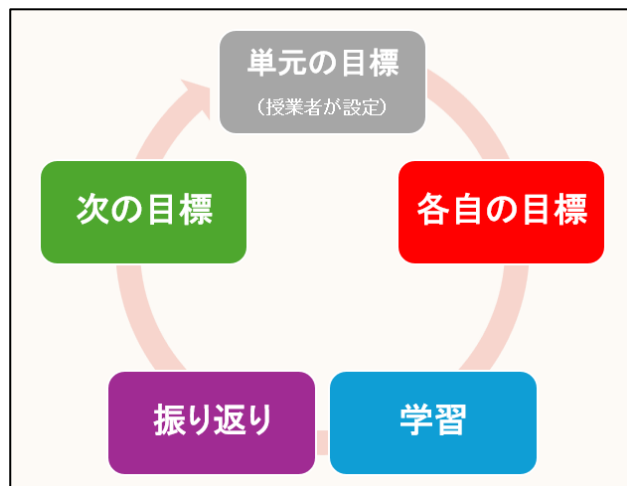
【資料9 汎用的な振り返りシートの例】

振り返りシート				
<div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 10px; min-height: 80px;"> Unit Goal (単元で達成すべき目標) </div>				
<div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 10px; min-height: 80px;"> Personal Approach (Unit Goal を達成するために自身が特に力をいれたいこと) </div>				
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> <div style="background-color: #f2f2f2; padding: 2px 5px;">Self-Check (Unit Goal について)</div> <div> 4 - 順調だ 3 - まあまあ順調だ 2 - あまり順調ではない 1 - 順調ではない </div> </div> <div style="padding: 5px;"> Personal Approach について振り返り「今回良かったのは～で、反省点は～です。理由は～です。次からは～します。」 </div> </div>				
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> <div style="background-color: #f2f2f2; padding: 2px 5px;">Self-Check (Unit Goal について)</div> <div> 4 - 達成できた 3 - まあまあ達成できた 2 - あまり達成できなかった 1 - 達成できなかった </div> </div> <div style="padding: 5px;"> Personal Approach について振り返り「今回良かったのは～で、反省点は～です。理由は～です。次からは～します。」 </div> </div>				
<div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 10px; min-height: 80px;"> Revision (次回の単元に向けての Personal Approach を記述 (継続していく場合は、今回と同じでもよい)) </div>				
Class	No.	Name		

7 まとめと今後の課題

最後に、振り返りシートを活用すべき場面についてまとめる。ここでは1つの単元を1サイクルで考える（資料10）。

【資料10 単元のサイクル】



(1) 単元の目標

年間指導計画に基づき、授業者が単元の目標を設定する。

(2) 各自の目標

授業者が設定した目標に対し、生徒が各自で目標を立てる。ただし、明確な目標を立てることが難しい生徒には、助言や修正を通した授業者の支援が必要となる。

(3) 学習及び振り返り

学習活動に臨み、振り返りを行う。この際、パフォーマンステスト後の「最終評価」だけでなく、タスクやパートごとの評価や「中間評価」など、評価の機会を複数回設けることが重要である。自己評価に取り組む中で、自分が立てた目標を見直し、学習の調整を図ることも大切である。

(4) 次の目標

これらを単発の取組とすることなく、次の単元の学習へと接続させることが振り返りの質を高めると考える。学びはその単元だけでは完結しないからである。

これらの各段階での生徒の記述を、「主体的に学習に取り組む態度」の評価に活用することが望ましい。それを実現するためには、生徒の記述をパフォーマンステストの評価の参考としたり、ルーブリックにその要素を入れたりすることなどの方法が考えられる。

1枚の紙面上で、生徒も授業者もこれまでの学習状況を把握しながら評価につなげることもできるという点で、振り返りシートの活用は有効であると考ええる。

8 参考文献

- ・『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（高等学校 外国語）』、国立教育政策研究所、2021年
- ・上山晋平『英語リテリング&ショートプレゼンテーション指導ガイドブック』、明治図書、2022年
- ・小林和雄・梶浦真『すべての子どもを深い学びに導く『振り返り指導』』、教育報道出版社、2021年